

私の仕事 この一年

京都府立図書館

野原 隆之介

京都府立図書館に配属されてから1年と少し過ぎました。これまでの私の仕事内容や日々感じていることをつらつらとですが書かせてもらおうと思います。

まず勤務先についてですが、京都府立図書館は京都市美術館や京都国立近代美術館が隣接する岡崎に立地しています。蔵書数は専門書を中心とした約130万冊で、各種データベースもそろえています。私が就職した平成28年には新しい「京都府立図書館サービス計画」が策定され、市町村支援・調査研究支援を中心とする取組を行いつつ、「知的な交流の場」の創設、行政支援サービスの推進など新たな都道府県立図書館像を打ち出そうとする図書館です。

自分の所属先は利用サービス課という所です。基本的な仕事内容は多くの方が最もイメージしやすい図書館の仕事、カウンター業務です。具体的には、利用案内や資料案内、レファレンスサービスなどがあります。レファレンスは当番の人がカウンターや電話で質問を受付しており、その質問内容は様々です。漢字の書き順など簡単なものや京都の企業からの「社史を作る上で調べてほしいことがある」などの質問があり、大部分を先輩方に頼りながら日々、業務を行っています。

他の担当業務としては選書です。主に日本十進分類法でいう7、8、9類を担当しています。選書はどんな資料が調査研究に役立つのかの見極めが自分にとって非常に難しいことがあります。新刊の情報は図書館流通センターが発行する新刊案内、出版社のホームページやチラシ、新聞書評、雑誌、他の図書館の受け入れ状況などを見て行きます。書店さんが図書館に選書用に持ち込む見計らいもあります。本を見る際は表紙や序文、目次、索引、参考文献、その本の重要な章を見て発注します。

図書館に勤めると逃れられない業務、本の修理も行ってきます。特に資料の永年保存が方針のため修理が重要な業務となっています。修理を行う上で、修理後でもまた元の状態に戻せるようにしておく可逆性の原則があります。そのため一度貼ってしまうと、はがすのが困難な図書館用品のページヘルパー、ブッカーは使用しません。ビニールのりやヤマトのりを使用して修理しています。大量のページはずれの場合は本を分解して製本しなおす作業を行っています。この修理の業務は本を作る上でも便利で、図書館の活用講座「本をつくろう」というイベントを毎年行っています。講師は毎年交代制で自分も強力な先輩方のバックアップのもと、講師を担当しました。講座参加者よりも講師の方が勉強になってしまいました。

不定期ではありますがサービスデザインチームでの業務も行ってきます。図書館でどのようなサービスができるか考えるチームですが、簡単に言うと「図書館でいろんなイベントやってみようぜ」的なお仕事をしています。「京都府立図書館サービス計画」にある「知的な交流の場」ナレッジベースと呼ばれる場を中心にイベントを行っています。京都府立図書館ではなく、他の図書館を会場にすることもあります。サービスデザインチームの活動例として、Wikipedia ARTSやWikipedia TOWNなどがあります。観光情報やレファレンスを行う上ではじめに見られることが多いWikipediaをまち歩きや美術館散策を行いつつ、図書館資料を使ってWikipediaの記事を充実させるというイベントです。これ以外にも自動化書庫を使った読書会、図書館外からの持ち込み企画などが行われています。遊びみたいに感じるときもあって、楽しいです。さらによく行われるものとして行政職員等と協力してNPO活動の支援を目的としたイベントも行ってきます。NPO活動を行う市民等を対象として、図書館の機能や資料を活用してもらい、いかに活動前あるいは活動中のリサーチが重要か実感してもらおう「シラベル」や、

NPO 活動における資金調達のためのクラウドファンディングセミナーなどが行われています。これらのイベントに、先輩方の仕事を後ろから眺めつつお手伝いしたり、参加者としてイベントに入り込んだりしています。

業務から少し離れますが「ししょまろはん」という職場の自己学習グループもあります。いろんな部署の人がヨコにゆるーくつながったグループです。「ししょまろはん」から何か仕事に関する発見があるので重要な場です。活動の一例として没年調査ソンというものがあります。人の没年を調べて著作権が切れているか確認し、国立国会図書館に報告して国立国会図書館デジタルコレクションで公開してもらおうという活動です。ただサービスデザインチームと「ししょまろはん」はメンバーが重複しており、イベント活動も多いため「今日のイベントはどっち主催？」など混乱することがあります。ただあらゆる人を巻き込むことに成功していることでもあるので、これはこれで面白い、と個人的に考えています。

最後に仕事をする中で感じていることを少し書こうと思います。自分のいろんな知識・能力不足は当然日々感じています。ただそれ以外にも都道府県立図書館や司書の今後の役割についても考えていかねばならないと感じています。配属されて1年がたったとき、「都道府県立図書館はいらないかも」というお話を図書館関係の人から聞いて、少しショックを受けたことがありました。京都府立図書館は市町村支援を重視していますが、市町村支援は資料のバックアップ機能だけでよいのか、他に何ができるのか、常に検証が必要と考えています。特に自分の多く行うカウンター業務は図書館に直接来館される方中心のサービスです。情報・資料を必要としている方は京都府立図書館のある京都市以外にもいるはずで、そのような方がいることを常に意識していきたいです。また司書についても変化が様々です。特に面白いのがエンベディッド・ライブラリアンです。エンベディッド・ライブラリアンは図書館という場所においてサービスを提供するのではなく、図書館から離れて利用者とともに活動してサービスを提供するライブラリアンとされています。今まで見てきたイベントで、いろんなNPO等の活動に司書が混じって貢献する、図書館に勤めてはいないが司書的な役割をチームで果たすという方々を見てきました。図書館利用者と図書館司書の同化は、図書館と司書の役割を考える上で面白い現象です。常にこの社会で図書館や司書は何ができるか考えつつ、能動的に動いていきたいです。

関西学院大学図書館

茅野桃華

社会人になって約1年経過しました。私の業務を報告するとともに、この場を借りて、1年間図書館に勤めた今の私が考えていることについても述べさせていただきます。

まず、職場についてですが、私は、学校法人関西学院に専任事務職員として就職し、大学図書館に配属されました。メインキャンパスである上ヶ原キャンパスの図書館です。大学図書館は、運営課と利用サービス課の2つの課で構成され、私は後者に所属しています。利用サービス課は、主に直接サービスを担っており、本稿では、利用教育、レファレンス、選書の3つをご紹介します。

利用教育は、1年生の基礎演習向け、3年生の研究演習向け、中学部・高等部向け等それぞれのレベルに合わせて行いました。課として力を入れている業務で、特に基礎演習向けの講習会はほぼ全クラスを対象としています。高校までの勉強と大学からの研究の違いは、私自身学生時代に戸惑ったことでもあり、講習会には、大学での研究にスムーズに移行できるようになるという効果もあるかと思います。入職後まもなく、講師として出向きましたが、わかりやすく伝えることや、90分間きっちり講義をすることは、思いのほか難しいものでした。また、図書・雑誌記事・新聞記事の探し方等の基礎的な内容を説明することで、学生の情報検索のレベ

ルがどのくらいかを身をもって知る機会にもなりました。

レファレンスにおいては、何より、話を聞くことの難しさを実感しました。利用者が何を聞きたいのか（それについて本人の認識が甘いこともあります）、何をどこまで自身で調べたのか等を聞き出す段階、つまりは私自身が検索を始めるまでの段階で苦戦することもありました。利用者は主に学生、教員であるため、レファレンス内容は学術的なものばかりです。それまで名前を聞いたこともなかった哲学者や面白い判例等を知る機会にもなり、レファレンス甲斐がありますが、知識不足も実感しており、レファレンス能力の向上は課題です。また、ただ質問に回答するのではなく、特に相手が学生の場合は、自力でほしい資料を手にすることができるよう、図書館活用術を伝授するようにしています。

最後に選書についてですが、収書業務は運営課が担っています。私は直接サービスを担う利用サービス課の課員として、また、学生の感覚と近いものを持っている新入職員として、学習図書選書会チームの一員となり、学習図書の選書業務にも携わっています。選書会は毎週実施され、資料の内容や著者、所蔵状況等を調べ、選書基準や利用者の需要等を考慮して選書します。最初は難しく感じましたが、今では楽しんで行っている業務です。大学図書館の蔵書について深く知ることができ、その知識は、レファレンスにおいても大いに生かされます。

他にも、各コーナー配架、督促、展示、一般公開利用等に関する業務を行いました。様々な場面で大学時代に図書館司書課程で学んだことが役立っています。

就職してもうすぐ1年となりますが、課題はまだまだ山積みです。レファレンスや電話での問い合わせにて、カラーコピーはどこでできるのか、試験の教室はどこか等、私の業務と関連していないことを学生から聞かれることも多々あります。私は「関西学院の職員」であるのに、こういったことに即答できず、申し訳なく思ったことは一度ではありませんでした。職員として、関西学院に精通することは、目下の課題です。他には、図書館の資料や取組みが学生へ届ききっていないと感じることもあり、それを解消できればと思っています。また、前述しましたが、私は学校法人に事務職員として勤めているため、数年後には他部署に異動するでしょう。その際には、学生時代に図書館司書過程を通して学んだこと、大学図書館の業務の中で培っていることを他部署でも活かし、また、他部署から大学図書館に働きかけられれば素敵だなと思います。